琉球大学学術リポジトリ

安心して過ごせる居場所のある学級づくり ―意図的・計画的な班活動を中心とした関わり合いを通して―

メタデータ	言語: ja
	出版者: 琉球大学大学院教育学研究科
	公開日: 2022-05-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 森根, 竜也
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002017966

安心して過ごせる居場所のある学級づくり

―意図的・計画的な班活動を中心とした関わり合いを通して―

森根　竜也

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・うるま市立勝連小学校

1.　テーマ設定の理由

これまで筆者は，年度途中から不登校になってしまった子や友人関係がきっかけで転校した子，いやいや学校に連れてこられるが結局何もせず帰るか，トラブルになり怒られて帰る子，学校はおもしろくないと言い続ける子，朝から寝ている子などを受け持ってきた。このような子どもたちの学校不適応には，さまざまな要因が重なっていると考えられるが，一つの要因として「気にかけてくれる安心できる仲間との関わりの欠如」や「辛さや悩みを共有できる友達の不在」という「仲間の不在」があげられる。そのように思うのは，さまざまな学校不適応を起こしながらも学校に留まることができた子というのは確かに存在し，そういった子どもたちには安心・信頼のできる仲間や友だちの存在があると感じられたからである。担任である筆者一人の力だけではなく，同じ学級の子どもたち同士で支え合うことができ居場所をつくりあげることで，子どもたちの学校不適応の解消を目指すことができるのではないかと考えた。筆者はこれまで，児童同士を関わらせることを意図して学級づくりをしてきたが，単発的で一時的な関わり合いに留まり，安心・信頼できる仲間や友達との関わりをもとにした，安心して過ごせる居場所づくりまで至っていないと感じている。そこで関わり合う場となる班活動を中心に実践できれば学級の児童相互の関係性が深まり，安心・信頼できる仲間や友達ができ，それによってさまざまな子どもにとって学級が居場所になるのではないかと考えた。そのことが，不登校やいじめ問題を未然に防ぐことにつながり，授業や学校に価値を見出せない子たちも関わりを通して，価値を見出しより良い学校生活につながると仮定し，今回のテーマとした。

2.　目的と方法

本研究では，意図的・計画的な班活動を中心とした関わり合いを学級の子どもたちと共に展開することによって，①気にかける関係性が生まれ（声をかけ合う，関心を持つ），②関わることの良さを味わえ，③仲間や自分の良さを感じ，違いも含めてお互いを尊重（相互理解），対等な関係を築くことができる（安心して過ごせる居場所のある学級づくり）かについて，観察，インタビュー，感想，アンケートなどを通して，活動後の変容を検証する。

3.　研究内容

(1) 居場所とは

大和久・丹野（2014）は，居場所とは，「信頼し安心できる人間関係であり，出番は授業や学級活動で活躍することです。その安心と自信の中からそれぞれの子どもの自己肯定感が育ち自立していくことができるのです」と述べている。

竹内常一（2016）は，「『居場所』とは人びとのつながりをつくりあげることをとおして，それにかかわるすべてのものがすべてのものに自由と平和を与える『場』である」と述べている。

このようなことから，筆者が考える居場所とはまずは気にかける（声をかけ合う，関心を持つ）仲間を持つことを第一歩とし，人と関わる良さを感じながら，違いも含めてお互いを尊重（相互理解）し，

お互いに対等な仲間として関われ，安心して自分のありのままが出せ，それを出しても排除や暴力の対象とされない，安心・信頼のある人間関係と考える。

(2) 班とは

大和久・丹野（2014）では，「班は，学校生活の中でつながりをつくり出す居場所としての集団です。同時に，豊かな活動を通して，そこで生まれるよろこびを共有するとともに，トラブルやもめ事を対話や討論を経ながら，平和的に乗り越えていく力を育む場所です。」「一人ぼっちでないと感じることは，生きていく力になります。私たちの班づくりの指導は，班や学級の活動を通じて，一人ぼっちでないと思える他者との関係を育てていくことにあります。」と述べている。

そのことからも，班活動を中心に据えて関わり合いをつくっていくことで，先述した人間関係づくりに迫れると考えた。

4.　研究の実際　（実習校Ａ小学校４年生，４クラス 121 名　令和３年９月６日～９月 17 日）

(1) 学級活動と班活動の取り組み

本実習では，班をつくり，自分達で話し合って目標を立て「国語と算数の授業でできるだけ応援し合って，一人でも多くの人が発表しよう」と取り組むことで①気にかける関係性が生まれる，②お互いの良さや頑張りを認め,声をかけ合い生活する良さを感じることができるかを検証するために実施した。３時間の授業と２週間の取り組みが次の図１である。

〇学級活動　題材名「関わり合うっていいな。仲間，自分っていいな。」（３時間）授業者：筆者

〇班の取り組み　１週目：４日間（9/7～9/10），２週目：３日間（９/14～９/16）担任との授業の中で

	学習のねらい	学習の流れ	
第１時	〇「国語と算数の授業内で応援し合って発表」の取り組みを提案し目標を出し合い，目標を立てることを学ぶ。	◎取り組む意義の確認 ◎個人目標を足し算する形で班の目標を決める。 ◎目標を達成するための取り組み方を班で考える。	
１週目	〇班の人に応援することを経験し声をかけることの良さを体験する。	◎国語と算数の授業で班の人に「発表しよう」と応援し合って，多くの人が発表に挑戦する。	班ノート
第２時	〇声をかけられて嬉しい声のかけ方かどうか，次の週に向けて応援の仕方を振り返ろう。	◎1 週目の取り組みについて振り返る。 ◎嬉しい声のかけ方か，声かけを考える。 ◎2 週目の班の目標を決める。	
２週目	〇相手が安心できる応援をし合って，一人でも多くの人が発表しよう。	◎国語と算数の授業で班の人にどんな声をかけ，声かけによって発表は増えたか考える。	
第３時	〇声をかけることの良さや受け取り方の違いを発見（相互理解）することができ，多様な関わりが必要なことを今後の学校生活につなげる。	◎うまくいった理由について話し合い，発表する。 ◎自分のワークシートを回し，良かった所やがんばった所等を班の仲間に書いてもらい相互に認める。 ◎自己や班全体の視点で振り返りを書き，発表する。	
第４時	帰りの会で取り組み全体を通しての振り返りアンケート		

図１　３時間の授業と２週間の取り組み

①第２時（中間の振り返り）

第１週の取り組みが終わって中間の振り返りを行った。１つの学級で，班ごとに前で発表してもらうと，「声をかけられると圧を感じる」といった意見があり驚いたが，その班に対しそれなら「そうだよ。発表した後に声をかけるといい」と対応を教えた班がありさらに驚いた。子どもたちのやりとりにより，発表前にかける言葉と，発表後にかける言葉があるということが分かってきた。

②第３時（児童のワークシートの記述より）

Q『温かい言葉を送ろう（お互いの良さや頑張りを認めたり，再発見したり（相互理解）する）』
〇Ａさんは最初はとても発表が苦手だったけど，グループの声かけがあったり自分でたくさん挑戦していっぱい発表

してすごいよ。　○ありがとう。発表の応援ありがとう。僕は優しいと思ったよ。 ○Ｂさんはリーダーになると，みんなのことをまとめていてくれてすごい。 ○声をかけてくれたけどわすれた。でもありがとう。発表をたくさんしていた。１日に３回ぐらいしてたかな。たいしたもんだ。　○すすんでホワイトボードに自分の意見を出してくれてありがとう。ぼくは参考になったよ。
Q 今回の活動をしてみて，良かったこと，何か気づいたこと，思ったことはなんですか？
○前は班の人との話などがなかったけど，班で取り組んでいるうちに楽しく話せた。 ○班のみんなが「発表がんばろう」「目標達成しよう」と声をかけ合って励まし合ったから目標達成できた。 ○仲間と協力して，自分がもっと発表できるようになりました。班の仲間と協力し合えたので，みんなのことがよくわかったり，いいところがみつかったりしました。 ○班の人達とけんかをしたりもんくをいいあったりしたけどみんなで協力し合ってポイントをためて班ですごいと思いました。だからぼくは，助けないとという気持ちが育ったと思いました。僕はこれからも助け合いのわを広げたい

図２　第３時の児童のワークシートより抜粋

③第４時（取り組み全体を振り返ったアンケート結果より）図３・図４参照

アンケート結果の数値が高かった理由として，「発表し終わった時いつもすごいとか言ってくれてうれしい」という子どもの声があったことや，中間の振り返りの中で発表が苦手な子への声かけを考えたことで，安心できる声かけが交わされ前向きに挑戦することができたと推測する。また，発表が取り組みの前より増えた理由に「班ノートにいろんなことをかいたりした」「班ノートで班の人とも少ししゃべれるようになって，“発表しよう”や“やってみよう”が増えました」等の記述もみられた。

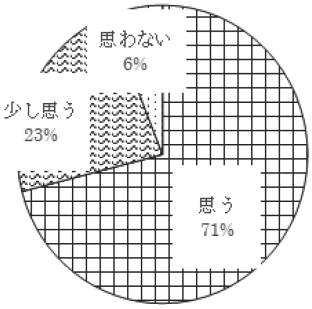

図３　一人で発表に取り組むより良かったと思いますか？

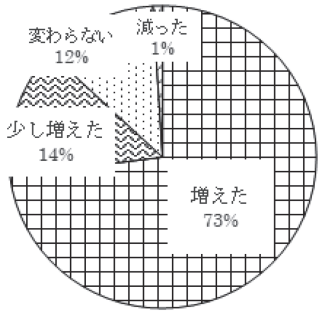

図４　発表は取り組みの前より増えましたか？

Q 班で取り組みをする前と今で何か変わったことはありますか？
○Ｃさんが安心する言葉をかけてくれる。○グループで話し合えるようになった。○班の人の役にたとうと思えた。 ○前は発表が大っ嫌いで全然やっていなかったけど，班で取り組んでいるうちに少し発表が楽しく思えました。 ○発表に自信がもてるようになった。理由は班のためにがんばりたかったからです。 ○この活動が始まるまでは，私は発表をやりたくても，勇気が出なかったけど，みんなが応援してくれたり，「クラスは仲間」であんまり恥ずかしくなくなったり，発表ができるようになった。 ○みんなと仲良くなれた。これからは班だけじゃなくクラスのみんなと仲良くなりたい。僕は自信がついた。

図５　第４時取り組み全体を振り返ったアンケートより抜粋

(2) 班ノートの取り組み

発表に取り組みながら，班ごとに毎日の思いを班日記として記録してもらった。

班ノートに取り組んだ理由として，①発表の応援をしているか外見では分からないが，内面では応援していることが分かる。②直接関わることが苦手な子が働きかけられてどうだったかを文字として表現する場をつくった。そのような関わりも安心できる居場所につながるのではないか。ということがあげられる。班ノートの取り組みの中で学年の教師が驚いたように次のことを話してくれた。

「場面緘黙があるＤさんは授業での発言はほとんど無く，自己決定も苦手でアンケートも回答せず自由記述も苦手である。しかし，班ノートに『発表していない』と記述したという行動自体に，自分なりに関わろうとしているのが見え驚いた。また，Ｄさんと同じ班で，発表しないＤさんのことを『やる気がない』と言っていたＥさん。しかし，班ノートの記述と担任の先生とのやり取りの中で，Ｄさんが発表が苦手なことを知り，理解していた様子が見られた」

他にも班ノートには「今日はそこまで発表できなかった」に対し「できなくてもＯＫ大丈夫」「つぎつぎ」や「今日Ｆさん休みかな？Ｆさんの分も発表がんばろう」「そうだね」等のやりとりも交わされていた。これらのことからも班ノートは直接話すことが苦手な子や直接は話せないことを，ノートに書くということを通して伝え，間接的な関わりができる場になったといえ，今後継続して取り組みたい。

(3) 学年の先生の話より

	エピソードや学年の先生の話より	児童の振り返りシートなどから
児童G	筆者が授業中観察時に，イライラした様子で床に座り込んでいた。担任より，「イライラしてしまうとうまく気持ちを伝えたりコントロールがうまくいかない子。班の中で発表はできないが，聞かれたことにうなづき首をふる等意思表示するようになった。」	「最初はできてなかったです。クラスのみんながすごい。そんなわたしは発表がんばるぞ！」最後のアンケートに発表は取り組みの前より少し増えた。理由は「班のみんなが発表しようっていってくれたから。」と記述。
児童H	自閉症の診断がおりている。周りの班の子が声をかけてくれることが多くなり，好き放題にノートを開けて学習していたが，順番よく使えるようになり，ボーっとすることがほとんどなくなった。口うるさく周りが声をかけているわけでもなく，発表の取り組み後から変わった。	本人の最後のアンケート“班で取り組みする前と今で何か変わったことはありますか？”の質問に「前は元気がなかったけど今は元気がでた」と記述。
児童I	「学力が低く，周囲との関わりが少ない。しかし，班ノートで班のメンバーと関わり励まし合ったことで，学習意欲が高まった。今現在，初めて算数が楽しいと話している。」	最後のワークシートで，今回の活動をしてみて良かったこと何か気がついたこと思ったことはなんですか？に対し，「すごくやる気が出た。すごくいい仲間。」と記述。
児童J	「学力が低く，序盤は取り組みにも積極的ではなかった。（取り組み自体を意識していない）しかし，グループのメンバーが発表がんばったらやみんなで発表してみようという声かけを行ったお蔭で，取り組みにも参加してきた。最後の授業でも発表した。」	「算数でＫさんがやり方一緒といった。僕はＫさんがいい人と思った。」や発表は取り組みの前より少し増えた。理由は「みんなから勇気をもらった。」班で取り組みをする前と今で変わったことは「前はあんまり話さなかったけど今は話す」と記述。

図６　学年の先生の話とその児童の言葉

(4) 取り組みの考察

授業のワークシートや振り返りアンケート，学年の先生の話，子どもたちへの聞き取りや観察から，意図的に班で目標を持って関わり合いながら取り組む活動を仕組んだことは，子どもが声をかける，かけられる，気にかける仲間関係が以前より増えたことが伺える。また，中間の振り返りを行ったことや班ノート内のやりとりが関係性を深めることにつながり，一人で発表するより班で発表に取り組む方が良かったと感じる子が多かったと考えられる。さらに，この関わりが配慮や支援が必要な子のやる気や元気などの感情面に何らかの肯定的な影響を与えているようであった。そしてそれは，安心して過ごせる居場所のある学級づくりにつながる第一歩になったと考える。

5.　研究の課題及び今後の研究

実習では学年４学級を対象にしたこともあり，多くの教師の意見を参考に２週間取り組んだ。その成果として，班を作り取り組みを仕組むことの重要さについて学年の教師全員が肯定的であり，要望から継続して２週目も同じ取り組みを行うことにした。この際，同じことを繰り返すことにならないよう取り組み方を振り返ることにしたのだが，それが子ども達の中から肯定的な意見だけでなく不安な声を引き出し見直すことにつながり成果を上げた。取り組みの振り返りを重視し，子どもたちが不安な声を出すことができ，それを一緒に考える学級になることが居場所作りになるのではないかと見通しを持つことができた。班活動を中心とした関わり合いについての年間計画の作成と実践，分析を通して班活動を生かした安心して過ごせる居場所のある学級づくりの在り方について次年度も考察したい。

引用文献

大和久勝・丹野清彦，2014,『班をつくろう』クリエイツかもがわ.
竹内常一，2016,『新・生活指導の理論』高文研.